◎特集:「旧朝香宮邸のアール・デコ」展より

EXHIBITION ART DECO AT THE PRINCE ASAKA RESIDENCE

図1

1925(大正14)年、パリで開催されたアール・デコ博覧会をご覧になった朝香宮ご夫妻は、新居をぜひアール・デコ様式によるモダンな洋館にしたいとお考えになりました。そのため白金台の宮邸は、全体の設計を皇室専門の設計集団である宮内省内匠(たくみ)寮工務課が、主要室内の内装をフランス人のアンリ・ラパンが分担するという、たいへん変則的なものになりました。

ラパンは準備から竣工に到るまで一度も来日することはありませんでしたが、自ら何点もの壁画を描くなど、全精力を宮邸の仕事に傾注しました。彼の手掛けた部屋の内装材は、すべて船便で運ばれ日本で組み立てられましたが、ある柱の美しさなどは、荷を解いた内匠寮の匠生(しょうせい)が思わずうっとりとするようなものであったといいます*1。現在、宮内庁の書陵部に保管されている『朝香宮邸新築工事録』には、日本側の施工に関するあらゆるデータが記録されており、資材の加工方法と注意点、また原産地の指定などが詳述されています。朝香宮邸には、日仏共に最上の素材が徹底した吟味のうえで用いられたのです。

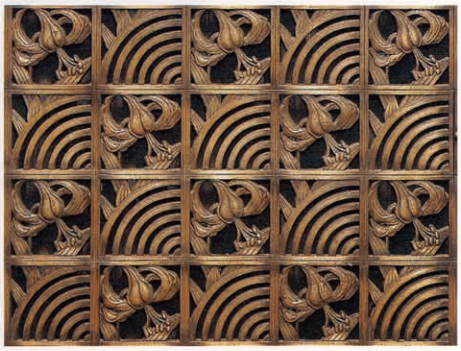

図2

当時の内匠寮では、海外の書籍などを通じて、欧米の建築・デザインを積極的に研究していました*2。しかし宮邸の仕事において、彼らはその模倣に終始したわけではありませんでした。例えば技手だった水谷正雄による照明のデザインには、興味深い東洋的な趣を見ることができます(図1)。そして彼らは優秀な職人の技に支えられた日本の工芸の伝統を、建物の細部すべてに渡って十二分に活かしていたのです(図2)。

図3

その意味で、世間的には無名の人々の、労を惜しまぬ繊細な仕事の集積が、ラパンやラリックらに拮抗する上質なものであり得たからこそ、朝香宮邸の品位ある独特な雰囲気が育まれたといっても過言ではありません。

足掛け4年にも及んだ準備期間を経て、宮邸は1933(昭和8)年に竣工しました。それは、ドイツにおけるナチス政権誕生や日本の国際連盟脱退など、騒然とした時代を背景に生まれた、宝石のような珠玉の建築物だったのです。(中原) ◆

図4

図1. 正面玄関照明(1階)

図2. 姫宮居間レジスター・部分(2階)
このデザインは、美術に造詣が深く、宮邸の内装にも積極的に関わられた允子(のぶこ)妃殿下の手によるものです。

図3. 宮内省内匠寮の人々
1929(昭和4)年頃
前列中央が権藤要吉技師
後列右が水谷正雄技手

図4. 姫宮寝室前照明(2階)

写真撮影(図1, 2, 4): 高村 規

*1. 藤森照信「日本のアール・デコ」、『アール・デコの館』、筑摩書房、1993年

*2. 権藤要吉は、大正14年から15年にかけて、主に宮殿建築研究のため、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、ベルギー、オランダ、オーストリア、アメリカに派遣されており、フランスではアール・デコ博を視察しています。